

12節. 「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。」

「言っておきたいことは、まだたくさんある」。8章26節においても主イエスは「あなたたちについては、言うべきこと、裁くべきことがたくさんある」と言われている。

「今」(ἄρτι、アルティ)。13:7「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」。聖霊が降る前の「今」と、聖霊が降った後の「後で」が対比されている。聖霊を送ってくださることが前提となっている「今」である。

「理解できない」と訳されている言葉は、口語訳では「堪えられない」、新改訳では「耐えられない」と訳されている。【NKJV】 cannot bear.

原語「βαστάζω、バスタゾー」は、「石を持ち上げる」(10:31)、「重荷を背負う」(19:17、主イエスが「自ら十字架を背負い」)、比喩的に「耐え忍ぶ」(ガラテヤ6:2)、また「キリストの名を担う」(使徒9:15)などの意味を持っている。

主イエスが弟子たちに言っておきたいことが「まだたくさんあるが」という言葉は15章15節「父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである」という言葉とは一見矛盾するように見えるが、15章15節は「高められたイエスの声として言われている」(伊吹)、つまり、復活と昇天後、聖霊としてヨハネの教会に現臨しておられる主イエスの声であるので、矛盾はない。

主イエスの言葉は、一回聞くことですべてが分かるのではない。その都度、聖霊の働きによって知らされるものである。このことは私たちの信仰生活からも分かる。一回学べばすべてが分かる、一度分かっただけでずっと分かるということはありません。聖霊の働きを信じつつ、その都度、知らされる、分からせていただくのである。

13節. 「しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。」

【NKJV】 "However, when He, the Spirit of truth, has come, He will guide you into all truth; for He will not speak on His own authority, but whatever He hears He will speak; and He will tell you things to come.

多くの動詞が未来形として語られている。主イエスの復活後に来るからである(20:22参照)。ここでは聖霊が「真理の霊」(τὸ πνεῦμα τῆς ἀληθείας、ト プニューマ テース アレーティア)と言われている。

「この場合の真理とは『真実』をもうちに含むものである。真実とはその言葉において信じ得る確固たるものであり、それゆえ同時に確約であり、それはその成就を信仰において現在先取りできるものである。」（伊吹）

聖霊は、ここでは、「あなたがた」を「真理」に導くので「真理の霊」と呼ばれている。「導く」（ὁδηγέω、ホデーゲオー）は、「手引する」という意味の言葉。

「動詞の『導く』はヨハネ福音書でここだけに出るが、『道』は、1:23、14:4, 5, 6に出て、……。ここで言えることは、14:6の「わたしは道である」ということから、その導く道はイエスだということである。すなわちわれわれは独力でこの道を辿る必要はなく、聖霊がわれわれを導くのである。従って14:5でトマスによって言われたように、その道を知らなくても聖霊がそこへ導いてくれるのである。イエスは14:6で「わたしは道、真理、命である」と言う。すなわち導かれる場所は「真理」であり、それが「命」なのである。」（伊吹）

「その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り」。聖霊は主イエスのように肉声をもって弟子たちに語ったことはない。聖霊の働きは、文字として書かれた（当時の弟子たちにとっては、自分たちが見聞きした）主イエス言葉、その業を想起させ、信じるように、また力づけられるようにすることである。

この主イエスの言葉で重要なのは、「自分から語るのではなく、聞いたことを語る」という点である。「自分から」とは、自分の欲（富、名誉、利益等々）から出る言葉であり、この「自分から」という言葉は、ヨハネによる福音書では「世から」と言い換えてもよい。この世は神の栄光のためではなく、自分の栄光、自分の名誉、自分の利益のために語る。

聖霊が「真理の霊」と呼ばれるもう一つの理由は、聖霊は「自分から語るのではなく、聞いたことを語る」からである。この場合の「聞いた」言葉とは、もちろん、主イエスの言葉である。これまで確認して来たように、主イエスの語る言葉も、主イエスご自分から語るのではなく、父なる神から聞いたことを語るなのである（7:17、8:26, 28, 38, 40、12:49、50、14:10）。それ故に主イエスは神様からの真理を語るのである（8:40「神から聞いた真理をあなたたちに語っている」、1:17「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。」）

「これから起こることをあなたがたに告げる」。「これから起こること」とは、「預言というようなことではなくて、将来に向かって開かれている命が、絶えずあからさまに光のうちに置かれるのである。将来は絶えず光に照らされて、絶えずより明るく復活において永遠の命へと愛へと照らし出されていくのであり、その中『真理』にわれわれが実をおいているということである。」（伊吹）

14 節. 「その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。」

「聖霊の働きはイエスを栄光化するのである。・・・。ヨハネ福音書におけるイエスの栄光はすべてこの聖霊による栄光化なのである。それは聖書のこれまで述べられたすべての働きの総決算とも言える。また 14:26 の「あなたたちに思い起こさせるであろう」という句と、一つの句として読まれねばならないであろう。すなわち想起とはただ過ぎ去ったことを単に未来のこととして啓示するのではないし、ただ新しく現在のこととするのではなく、そのことが栄光の出来事として絶えず未来へ向けて現前するのである。・・・。

ヨハネ福音書の地上のイエスの現在における顕れは、すべてこの聖霊の働きの上に成立し、それによって可能になっているのである。この福音書は、その意味では歴史化されてそこから端なる歴史的イエス像が抽出されることを望んでいないのである。なぜならそれは聖霊と絶縁し、コピー化可能な実体化されたキリスト像であり、真実のイエスの否定へと繋がっていく危険がある。イエスの栄光を見ることのうちには常に聖霊が働いているのである。そしてこの栄光化の未来形は世の終わりまで将来を開いていく終末形であり、確約である。」(伊吹)

15 節. 「父が持つておられるものはすべて、わたしのものである。だから、わたしは、『その方がわたしのもを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである。」

14 節の「わたしのもの」とは、ここではっきりしているように「父が持つておられるものすべて」である。13 章 3 節には「イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り」とある。

「ここでは第一にイエスが、父から受けた栄光について考えるべきであろう。しかしそれはまたその栄光としての愛であり、その輝きとしての光であり、命であり、信じる者たちであり、霊である(3:34)。それは『父が持っているすべてのもの』が、すべてイエスのものであることである(15:19, 20)。ただし子は父と同様な仕方ですべてを所有しているのではなく、父から与えられそれを受けるといふかたちで永遠に所有しているのである。

『あなたがたに告げる』とは、そのイエスの栄光を顕すことである。『告げる』は、13 節の終わり、14 節の終わり、15 節の終わりに反復的に繰り返されている。栄光の輝きは聖霊により告げられる言葉において、顕れる。それは全く新しい別の啓示をもたらすことではない。」(伊吹)